



連載

ビブリア・トーク
—私のオススメ—

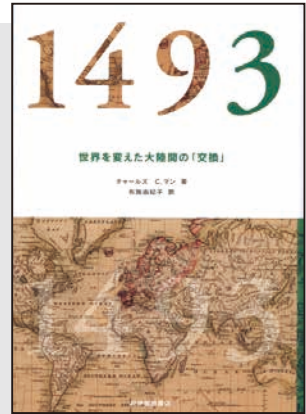
… 鳥澤健太郎 ((国研) 情報通信研究機構・データ駆動知能システム研究センター)

1493

—世界を変えた大陸間の「交換」

チャールズ・C. マン 著, 布施由紀子 訳

紀伊國屋書店 (2016), 811p., 3,600 円 + 税, ISBN : 978-4314011358



本書の内容

本書は1942年にコロンブス(Christopher Columbus)がアメリカ大陸に到達した結果、一体何が起きたのかを述べた一種の歴史書である。分厚い本であるが、凡百の歴史書と異なり、主題は、王侯貴族から大立者まで、いわゆる有名人がいつ、どこで何をしたか、ではない。人間以外の生物や有名人以外の人たち、そのほかのモノがどのように歴史を作り出していったかが書かれている。もっと踏み込んで言えば、歴史学者のAlfred W. Crosbyが名付けた「コロンブス交換」、つまり、もともと独立に進化してきた複数の生態系が、コロンブスのアメリカ大陸到達をきっかけとして、全世界規模で混じり合ったこと、また、そのコロンブス交換が、帝国の没落のような普通の歴史書が取り上げているビッグイベントに繋がったことが述べられている。

と、ここまで読んだところで、大学受験で世界史を選ばれた読者はウズウズしているであろう。察するに「つまるところ、あの話しですね? ヨーロッパ大陸から持ち込まれた天然痘、馬、銃の威力でインディオの帝国は壊滅したと。その話であれば、受験で耳タコだし、鳥澤さん、覚えてないんですか?」といったところであろう。いや、ちゃんと覚えてます。それでも本書を紹介する理由があるのです。また、別方向からの攻撃としては、食い意地の張ったタイプの御仁が言うであろう。「コロンブスがいなければ、トウガラシもジャガイモ、トマトも南米以外には広まらず、ピッツアマルゲリータも担々麺もフライドポテトもこの世には存在しないかもしれない、という例の話でしょうか? その類なら最近新書(たと

えば、文献1))で読みました」

あにはか
豈図らんや、この本のメインコンテンツはそれらの話ではない。断じてない。そうした話を書いた本ならば、米国タイム誌ノンフィクション部門第1位とはなり得ない。本書の真骨頂は、通俗的歴史理解よりもはるかに深いレベルでコロンブス交換がグローバルな歴史に巨大なインパクトを与えていたことを、世界各地の豊富なエピソードと科学的裏付けとともに記述していることにある。ネタバレを防ぐために多少パラフレーズして言うと、たとえば、アメリカの南北戦争の原因の1つは、三大陸の異なる生態系が会ってしまった上に、不幸な形で微生物を巻き込んだ適者生存が起きてしまったことであり、本書に陽には書かれてはいないが、昨今話題の「分断されたアメリカ」も、コロンブス交換の帰結であることなどは、歴史オタクを自認している私にとっても目からウロコであった。

また、我々アジア人にしてみれば、担々麺は脇に置いておくとして、海の向こうのアメリカ大陸でのすったもんだが、やはり生態系の混合を介して、中国での災害の増加を引き起こし、清朝没落の原因の1つとなったことなどは驚きである。あたかも、現代の社会問題が先取りされているかのようにも読める。これらの大きな物語の合間には、17世紀に太平洋を流れ、流れたニッポンサムライがメキシコで中国産の絹の護衛についていて、その戦闘力が高く評価されていた、などといった「へー」なエピソードがこれでもかと挟まる。三船敏郎扮するサムライがお宝を護衛する黒澤明監督の傑作映画で、ジョージ・ルーカス(George Lucas)もパクった『隠し砦の三悪人』というのがあるが、上のエピソードを読むと、この

映画は、いっそのこと、メキシコ、アメリカの国境地帯が舞台の西部劇『荒野の用心棒』（実はこれも黒澤映画のパクリ）で主演したクリント・イーストウッド（Clint Eastwood）と三船敏郎の共演で、17世紀のメキシコを舞台にした「荒野の三悪人」でも良かったのではないかと、とまったく何の役にも立たない想像も膨らむ。また、これも本書に書かれているわけではなく、少々乱暴な議論になるが、分断されたアメリカの申し子、トランプ（Donald John Trump）大統領は地球温暖化抑止に興味がないようであるが、仮に彼のせいで地球温暖化の進行が加速し、人類が窮地に陥るとすれば、これは分断されたアメリカをもたらしたコロンブス交換のためとも言えるかもしれない。コロンブス交換、つまり、グローバル化は巨大な利益をもたらした一方で、アメリカ、いや人類の呪いなのではないかとも思えてくる。

人間の底力？

少々脱線したが、本書に満載された、科学的な裏付けを持ちながら、一種パラドックスに満ちた歴史的エピソードとそれらを貫く説得力のある議論は、上述のような想像を促さずにはいられない。これだけ大量のエピソードと科学的知見を文献やさまざまなデータから渉猟し、分厚いのに一気に読ませるだけの本にまとめる離れ業は、フライドポテトにステーキで育った肉食系人間であるからこそできる力技であって、我々には到底真似ができないと諦めに似た感想すら浮かんでくる。

というわけで、この本がどうしてオススメなのかを書いてきたが、当然多くの読者諸賢は疑問をお持ちであろう。なんだって情報処理学会学会誌でこの本が紹介されなければいけないのか？ そうなのである。それには深い深い訳があるのである。昨今のAI、ビッグデータのブームでは、多種多様なデータをAIで分析し、今まで見えなかったことが見えてきたという成功譚が目白押しである。しかし、考えてみると、本書の著者はAIこそ使わないものの、やっていることは同じである。大量の文献や過去の気象データ等々から、今まで見えなかった歴史解釈を見つけ

てきたということである。これはつまり、AI等々のできる、と言われていることを、フライドポテトがエンパワーしているとは言え、人間がやったとも解釈できる。問題はそのクオリティである。データマイニングの古典的成功例「ビールと紙おむつの売り場は近づけた方がよい」はもはや古すぎるという非難を承知で言うが、片や「ビールと紙おむつ」、片や多くの歴史通がうなる「生態系の混合で起きた南北戦争、清帝国没落」である。マシンと人間の差はかくも大きい。私の専門の自然言語処理でも仮説的な将来のシナリオをマシンで自動生成する研究が始まっており^{2), 3)}、一部の成果は一般に公開されている。中には学術論文の報告を一部先取りするようなシナリオを自動生成したケースもあるが、「AIが発達すると、皆話し相手ができて結婚する人が減り、少子化が進んで日本経済は窮地に陥る」などというホンマカイナなシナリオも自動生成されて、突っ込みどころは満載である。確かに困碁は人よりもマシンが強くなった。マスコミでは人の居場所がなくなるという議論がかまびすしい。しかし、本書のような人間の離れ業を読むと思わざるを得ない。シンギュラリティ予定日の2045年までに、こんな本を自動生成するマシンが本当に実現するのか？ ブームに乗っかるのも切って捨てるのも簡単ではある。しかし、本当に必要なことは、たまには人間の底力に驚嘆し、AI研究で登らなければならぬ山の高さに思いを馳せ、コツコツと麓から登り始めることではなかろうかと。

参考文献

- 1) 山本紀夫：ジャガイモのきた道—文明・飢饉・戦争、岩波新書（2008）。
- 2) Radinsky, K. and Horvitz, E. : Mining the Web to Predict Future Events. In the Proceedings of WSDM 2013, pp.255-264 (2013).
- 3) Hashimoto, C. et al. : Toward Future Scenario Generation : Extracting Event Causality Exploiting Semantic Relation, Context, and Association Features. In the Proceedings of ACL 2014, pp.987-997 (2014).

(2016年12月8日受付)

鳥澤健太郎（正会員） torisawa@nict.go.jp

1995年東京大学大学院博士課程中退。現在、情報通信研究機構・データ駆動知能システム研究センター・センター長。本会理事。博士（理学）。専門は自然言語処理。日本学術振興会賞など受賞。最近の成果は、Web情報分析システム WISDOM X (<http://wisdom-nict.jp/>にて公開中)、対災害 SNS 情報分析システム DISAANA (<http://disaana.jp/>)。本文中の「AIが発達すると日本経済が窮地に陥る」という将来シナリオは WISDOM X の出力（現在はデータを更新したため出力されない）。